

南アルプス市立小笠原小学校 自己評価書

令和7年1月5日作成

校長：志村 泉

記述者・職名：武田 幸子・教頭

学校教育目標

校訓「あかるく かしこく たくましく」

教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成

具体目標 ① 労をいとわず働く子

② 自分を明るく表現できる子

③ 進んで学ぼうとする子

④ 思いやりがあり、礼儀正しい子

⑤ 健康でたくましい子

本年度の学校経営方針と理念

「喜んで登校し、満足して下校できる」明日が待たれる学校の創造

(1) 安全・安心な学校づくり推進

(2) 教育の不易と流行の見定めと率先垂範による教育の推進

(3) 研究研修活動を活性化し、主体的・対話的な授業づくりの推進

(4) 楡形中学校区小中一貫教育に取り組み、地域が一体となった教育の推進

(5) 学校評価システムによる学校経営の推進

学校経営目標・具体的な取組

「持続可能な社会」の創り手を育成する＝「一人も置き去りにしない教育」の実現

はなまるスマイル「笑顔いっぱい」の学校の創造

① 学びをつくる

◇ 子どもが主体的に参加し、楽しさを感じ、わかったと実感できる授業づくり

② 心をつくる

◇ 小笠原流礼法の極意である「相手を大切に思う心」を「自然に表現できる」子どもの育成

◇ 学校教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成の意識化、共有化、日常化

③ 良い習慣をつくる

◇ 基本的な生活習慣の確立。自己管理能力の育成

評価方法

児童・保護者・教職員の3者に対してアンケートフォームにより回答を得た。質問に対する回答選択肢は基本的に以下の4段階になっている。

A: そう思う

B: ややそう思う

C: ややそう思わない

D: そう思わない

このうちAとBは肯定的なプラス評価であり、CとDは否定的なマイナス評価である。A・Bを合わせてプラス傾向、C・Dを合わせてマイナス傾向として比較し、全体の傾向もつかみつつ、昨年度の割合との比較をすることで、各項目の評価・課題について考察を行った。

1. 全体的な傾向

教職員全体として、「児童理解とコミュニケーション(12)」「いじめ・不登校の早期発見(13)」といった対人支援に関する項目や、「報告・連絡・相談(3)」などの組織運営に関する自己評価が非常に高く、R6年度から継続して良好な状態にある。一方で、「地域連携(18)」や「働き方改革(22)」、および「読書指導(9)」については課題が残る結果となった。

児童アンケートからは、「学校の楽しさ(1)」や「朝食の摂取(16)」などは前年同様に高い水準を維持しており、児童が安定した生活基盤を持って登校していることが伺える。特に「相談できる友達がいる(3)」の割合が10%以上向上(66.7%→77.1%)したことは、学級経営や対話的な学びの成果と言える。一方で、学習の「発信力」や「読書習慣」には課題が見られ、教職員が感じている「児童間の能力差」や「読書指導の不足」が児童の自己評価にも反映される形となった。

保護者アンケートからは、全体的に肯定的な評価(A+B)が8割を超える項目が多く、学校経営に対する保護者の安定した信頼感が伺える。特に、「学校行事(7)」や「先生への相談(6)」に関する評価が向上しており、学校と家庭の距離が縮まったとも言える。一方で、「スマホ・タブレットの利用ルール(18)」については数値が大幅に低下しており、家庭でのメディア管理が課題としてあげられる。

2. 教職員の自己評価アンケートについて

① 学習指導・評価(項目①, ⑧, ⑩, ⑪, ⑱, ⑳)

- ・現状: めあての提示(10)は定着(A評価72.7%)しているが、評価(11)や発問の工夫(20)については「B(ややそう思う)」の割合が高く、自己研鑽の余地を感じている教員が多い。
- ・考察: 山梨スタンダードに基づいた形式(めあて等)は確立されているが、自由記述にある通り「児童の能力差が大きく、実態に合わせた教材準備に時間がかかる」ことが、深い学びへの課題となっている。
- ・考察: 校内研(6)のA評価が34.8%→50.0%と大幅に改善している。「諸会議7」への主体性も向上しており、組織としての活性化が見られる。学習指導としては、学び合い(19)への意識も高まっている。

② 児童支援・組織力(項目③, ⑫, ⑬, ⑭, ⑮, ⑯)

- ・現状: 児童理解(12)や早期発見(13)のA評価が8割を超え、非常に高い。
- ・考察: 教職員が高い危機意識を持ち、子どもたちに寄り添う姿勢が本校の強みである。一方、あいさつ指導(15)では「ありがとう」が少ない、外部の人に挨拶できない等の課題が指摘されており、規範意識の定着には継続的なアプローチが必要である。
- ・考察: 報連相(3)のA評価が10ポイント向上(66.7%→76.9%)。チームとしての土台が強化されている。

③ 外部連携・情報発信(項目⑰, ⑱)

- ・現状: 広報(17)は大幅に改善(A評価10%→42.3%)したが、地域連携(18)は依然としてC・D評価が計40%近い。

・考察：HP等の広報活動は進んだが、「地域の人材・施設の活用」は担任個人の努力だけでは難しく、組織的なマッチングやボランティア募集の仕組みづくりが求められている。

④ 働き方改革と校務分掌(項目⑤, ⑫)

・現状：働き方改革(⑫)のA評価が36.4%→7.7%へと激減。「業務内容の偏り」や「人手不足」への不満・疲弊感が自由記述に顕著に現れている。

・考察：意識はしているが実態が伴わない状態にある。分掌の割り振りや、特定の学年に負担が集中する体制の抜本的な見直しが必要である。

3.児童のアンケートについて

① 人間関係・安心感(項目③, ④, ⑭)

・現状：相談できる友達(③)は大幅増。一方で、相談できる先生(④)については「いる」が73.4%と前年比でやや減少し、「わからない」が22.1%に増えている。

・考察：児童同士の絆は強まっているが、教職員が「児童理解に努めている(教職員項目⑫ A:80.8%)」と自負している一方で、児童側には「どの先生に、どこまで相談してよいか」が明確に伝わっていない可能性がある。

② 学習意欲と主体性(項目⑨, ⑪, ⑯)

・現状：授業の理解度(⑨)は高い(肯定約89%)ものの、授業中に自分の考えを伝えている(⑪)のA評価は22.4%と低迷している。

・考察：「聞く・わかる」という受動的な学習は成立しているが、教職員側が課題としている「対話を意識した学び合い(教職員項目⑭)」については、児童にとってまだハードルが高い状態であると言える。

③ 生活習慣・規範意識(項目⑥, ⑮, ⑰, ⑱)

・現状：朝食(⑮)や早寝早起き(⑮)など、家庭の協力が必要な基本的な生活習慣は非常に良好である。無言清掃(⑥)への取り組みは、A評価が21.6%と全項目中で最も低く、課題となっている。

・考察：挨拶(⑭)や清掃(⑥)といった、自律心が求められる公共の場での行動において、自己評価が伸び悩んでいる。教職員アンケートでも「挨拶が課題」とされており、学校全体での取組が必要である。

④ ICT・メディア利用(項目⑰, ⑱)

・現状：スマホ所有率(⑰)は46.9%(前年比+3.3%)と増加傾向。家庭のルール(⑱)は約65%で横ばいである。

・考察：所有率が上がる中、ルールのない家庭が約35%存在している。ネットトラブル等の未然防止に向けた、情報モラル教育の継続が必要である。

○今後の指導の方向性の例

1. 「発信」へのハードルを下げる工夫

- 授業中、挙手だけでなく ICT 端末(ムーブノート等)やペア対話を活用し、「自分の考えが認められる経験」を積み重ね、項目⑩の改善を図る。

2. 教職員への信頼を可視化する

- アンケートだけでなく、日常の何気ない会話の機会を増やし、「いつでも話を聞くよ」という姿勢をより具体的に児童に伝え続ける。

3. 読書・清掃活動の再活性化

- 低迷している項目(⑥, ⑬)に対し、図書委員会や美化委員会との連携を強化し、「やらされる活動」から「自分たちで学校を良くする活動」へのシフトを目指す。

4. 保護者アンケートについて

① 学校生活と相談体制(項目①、⑤、⑥)

- ・現状: 「学校は楽しいか(①)」の肯定率は約 83%と高水準を維持している。
「相談できる先生がいる(⑥)」は 75.8%→78.0%へ向上し、「わからない」という回答も減少している。
- ・考察: 教職員の児童理解や保護者対応が、保護者の安心感に繋がっている。学校が「相談しやすい場所」として認知されていることは、本校の大きな強みだと考える。

② 教育活動の可視化(項目⑦、⑧)

- ・現状: 「行事が様子を知る機会になっている(⑦)」の A 評価が 41.0%→48.7%へ大きく向上している。
反面、「学校(学年・学級)だよりや HP で様子がわかる(⑧)」の A 評価は 26.5%→21.0%へ減少。
- ・考察: 対面での行事(参観・運動会等)は満足度を高める大きな要因となりましたが、日常的な情報発信(HP 等)については、より「タイムリーな」内容を求める保護者の期待値が上がっていることが推察される。

③ 学習と生活習慣(項目②、④、⑪)

- ・現状: 「朝食(③)」や「家族での挨拶(⑪)」の肯定率は 98%以上と極めて高い。「授業の内容が分かっている(②)」の肯定率も約 88%と高い水準で安定している。
- ・考察: 家庭での基本的な生活基盤が整っており、学校での学習活動を支える土壌は非常に良好であると言える。

④ ICT 端末の利用実態(項目⑰、⑱)

- ・現状: 携帯・スマホの所有率(⑰)は 31.4%→33.4%と微増。しかし、携帯・スマホの「家庭内ルールがある(⑱)」は 93.7%→83.9%へ、約 10 ポイントの大幅な低下がみられる。
- ・考察: 端末が普及する一方で、家庭内でのルール作りや管理が追い付いていない実態がある。学校での Chromebook 活用が進む中、家庭での適切な使い方の指導がより一層必要となっている。

⑤保護者の自由記述より

○担任及び先生方の対応について

- ・子どもや保護者に寄り添った対応や細やかな配慮をしていただき、ありがたいという意見が多く寄せられた。
- ・少数ではあるが、「宿題が多い」「学級の間人間関係が不安」といった意見もあった。

○学校ホームページについて

- ・HPで学校の様子を見るのを楽しみにしている。という意見がある中、もっと更新をしてほしいという意見や下校時刻が学年便りと同じぐらいであり、困ったとの意見もあった。

○Chromebookの活用方法について

- ・連絡帳や宿題のドリル学習としての活用は良いが、家庭での使い方のルールに課題がある、特に低学年にとって持ち帰るのに重い、1年生は紙に書く学習が大切なのではないかという意見が寄せられた。

○まとめ

本校の教職員は、児童一人ひとりに対して非常に誠実に向き合っており、教員間の連携も良好であるといえる。この「組織の和」を維持しつつ、今後は「個の負担を減らす仕組みづくり」と「地域を巻き込んだ教育課程の編成」に注力することが、さらなる教育活動の向上に繋がると考えられる。施設・設備への肯定率も高いが、実際には施設も古く、継続的な整備状況の把握と必要に応じた市への要請等の発信が必要である。

保護者アンケートの結果から、相談体制や行事のあり方において前年度を上回る評価を得ることができた。これは学校と家庭の連携の成果と言える。更に肯定率の上がった相談体制を継続し、「わからない」層への周知理解が必要である。評価が低下した『広報の充実』として、HP等の更新を義務化するのではなく、例えば学年・ブロックの情報担当を中心に「今週のベストショット」をできるときに掲載するなど、持続可能な広報体制を工夫することも考えていきたい。また所有率が増加する一方でルールの形骸化が見られるスマホやタブレット等『ICT端末の利用環境の整備』も課題である。保護者のルール設定率(83.9%)に対し、児童の認識(65.1%)が低く、今回のアンケートで最も保護者と児童の認識に開きがあった項目だった。学校での活用が進む分、家庭との「スマホ・タブレット利用誓約」の再定義など、実効性のある対策が必要であり、家庭と歩調を合わせた指導も必要である。

相談の心理的ハードルについては、保護者の学校への信頼(78.0%)は高いものの、児童の「先生に相談できる」という回答は73.4%に留まり、「わからない(22.1%)」という層が存在している。大人が「いつでもおいで」と言うだけでなく、児童側から「この先生なら話せる」という安心感を醸成する「個別の関わり」の質的向上が求められる。全職員が「全児童の担任」という意識で声をかけるなど、チーム学校で全校児童の安心安全に努め、学校経営目標のはなまるスマイル「笑顔いっぱいの学校」の創造の実現につなげたい。